

わたしのモンゴル研究—1976～2016 年

二木 博史

東京外語大の修士課程では最初は 17、18 世紀のオイラト史をやろうとおもい、チベット語やマンジュ語の史料をよむための勉強をしていたが、偶然 16、17 世紀のモンゴル法「白樺法典」にめぐりあった。これは発見されたばかりで、本格的な研究がでていなかった。さいわいモンゴル留学中、この法典を発見しテキストを出版した学者（ペルレー）の指導を受けることができ、修士論文をまとめることができた。この論文は AA 研の『アジア・アフリカ言語文化研究』（1981 年）に掲載され、わたしのデビュー論文になった。

一橋大学の博士課程では田中克彦ゼミに属した。モンゴルの固有法を研究するための資料はかなりのこされていたので、しばらくはモンゴル法制史、社会史関係の勉強をしたが、単位取得論文のテーマは現代史にかえた。モンゴル科学アカデミー『モンゴル史』を翻訳し、くわしい訳注をつける作業のなかで、モンゴル現代史につよい関心をもつようになったからだ。単位取得論文の一部は「ダムバドルジ政権の内モンゴル革命援助」として『一橋論叢』に掲載された。このとき以来、わたしのモンゴル現代史でのおもな関心は、モンゴル、中国、ロシアにわかれているモンゴル人が 20 世紀前半におこなった統合のための運動、パンモンゴリズムである。

韓国の短期大学で 5 年ちかく日本語をおしえたあと、1989 年に東外大に助教授の職をえた。ちょうど社会主義諸国で民主化運動がおこったとして、モンゴルでも 1990 年に一党独裁体制が崩壊した。モンゴルに自由にいけるようになり、資料収集、とくに図書館の利用が可能になったことは、たいへんさいわいだった。1991 年の秋から 1 年間、国際交流基金の派遣でモンゴル国立大で講師をつとめることになり、脱社会主義のプロセスを直接観察できたこともとても有益だった。この時期以来、ほぼ毎年モンゴルの国際会議で報告し、資料をあつめている。

モンゴルでいちばん注目をあつめたのはおそらく 1921 年の革命の指導者に関する研究で、かつては革命の最高指導者とみなされたスフバートルよりも、ロシア出身のブリヤート系モンゴル人のリンチノがより重要な役割をはたしたという報告（1997 年の国

際モンゴル学会）は、主要な新聞でおおきくとりあげられた。

スフバートルの脱神話化は、在外研究でケンブリッジ大学に滞在したときに *Inner Asia* 誌に投稿し、のちにアンソロジー *The History of Mongolia* (2010) にも再録された論文 “A re-examination of the establishment of the Mongolian People’s Party, centring on Dogsom’s memoir” (2000) でもあつかわれている。

ヨーロッパから戻った年（2000 年）から 2 年間、トヨタ財団の支援で「満州国・蒙疆政権時代の内モンゴルに対する日本の啓蒙政策と内モンゴル人の対応」という共同プロジェクトをすすめた。このプロジェクトにより、中国ではうしなわれ、日本にのみこっているモンゴル語定期刊行物の研究をすすめることができ、代表的文学者エルデムトゥグスやヘーシンゲーの作品を発掘した。内モンゴル近代史でもっとも重要な人物のひとりボヤンマンダフ（1946 年に東モンゴル人民自治政府議長）を再評価した研究もこのプロジェクトの産物だ。

2002 年から 21 世紀 COE プログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」の在地固有文書班に所属できたことは、たいへん幸運だった。このプログラムにより英文で刊行した 2 冊のうち、とくに *Landscapes Reflected in Old Mongolian Maps*（2005 年、上村明氏と共著）は、その後のモンゴル古地図研究の科研費の獲得におおいに役にたった。「モンゴルにおける景観認識の歴史—古地図の研究」（2009—2012 年）、「モンゴルにおける地図作成とガバナンス」（2012—2015 年）のいずれのプロジェクトもオランバートルで国際会議を開催し、その成果を出版した。現在も「モンゴルにおける境界と越境の歴史」（2015—2018 年）というかたちでつづいている。

モンゴルでは民主化のあと、個人所有の多数の写本や木版本が市場にでた。モンゴルに出張するたびにそれらをかきもとめ、研究につかてきた。宗教関係のものに興味ぶかい資料がおおく、これまでツァガン・ウブグン（代表的な福神）信仰、ジェブツンダンバ・ホトグトの伝記、ダンザンラブジャー作の寺法、清朝発行の度牒（出家証明書）などについての研究を発表した。